

成果報告書

学 校 名 横浜市立南本宿小学校

活 動 テ ー マ 名 豊かな海をつくる里山の恵み ～森・川・海のつながりを生かして～

実践の概要・ねらい

本校ではこの30年来、教育水田活動を実施し、全児童が稲作を体験している。教育水田は帷子川水系の源流域の里山にあり、この水が田をうるおし、帷子川を流れてやがて東京湾に注ぎ込む。東京湾をかつてのような豊かな海にしていくためには、水質の改善だけでなく、源流域の森を中心とした流域全体の環境改善が重要である。自分たちの教育水田活動が川を経て海とつながっており、源流域の豊かな森を育むことで豊かな海の再生が可能であることを、実際の体験を通し学習するようにし、成果を地域に広げたい。

この活動は、全校での教育水田活動を核としながら、各学年ごとに帷子川の源流から上流・中流・下流、さらには海辺までの自然に親しみ、地域のNPOの協力を得ながら、それらのつながりを実感できるようなプログラムと組み合わせ、「わたしたちの住むまちの自然は、川を通して海とつながっている」ことを意識させるものである。

実 践 計 画

<目次>

- 全学年 単元名「教育水田活動」
- 5年 単元名「三浦宿泊体験学習」
- 5年 単元名「帷子川環境学習」
- 5年 単元名「JAMSTEC 見学」
- 5年 単元名「地域の自慢の南本小をARアプリでアピールしよう！」
- 2年 単元名「新江ノ島水族館見学・海の観察」
- 4年 単元名「横浜港見学」
- 個別支援学級 単元名「三浦合同宿泊学習」
- 全学年 単元名「帷子川ミニ水族館」



1 単元設定の理由

本校は帷子川水系の源流域の里山にあり、近隣の谷戸では数十年前まで水田耕作が行われてきた。学区内は現在でも古くからの景観や行事が比較的良好に保たれているが、水田はすでになく、日々家庭や給食で食べている米がどのように作られ、稲作が地域の自然や文化とどのように関わっているか、水系を通して海とどうつながっているのかを児童が意識することは難しくなっている。

そこで本校では、近隣のこども自然公園内の谷戸を水田として活用し、子どもたちが教育水田活動を通してこれらのつながりを意識するとともに、友達と協力し合いながら地域の自然や人と関わっていくことをめざして本単元を設定した。

2 単元目標

稲作体験を通して地域の自然や人とかかわる中で、教育水田やその周囲の自然に興味をもち、水系を通じた川や海とのつながりを考える。

3 単元の評価規準

- ①米作りに関わるそれぞれの活動の意味や大切さに気づき、友達と助け合いながら進んで取り組んでいる。
- ②教育水田やその周囲の自然に興味をもち、水系を通じた海とのつながりを考える。
- ③地域の自然や文化、人とのつながりの大切さを知り、自分にできることを考える。

4 単元の指導計画

時	学習活動	学年	指導上の留意点
2	もみまき	2	自分達でもみをまく体験を通して、柔らかな土や種もみにふれ、自然とのふれあいを深める。
2	田起こし見学	1・6	年度最初の水田作業を見学することで、1年間の水田活動への見通しをもてるようにする。
2	苗床草取り	2	もみまきをした後の苗の成長を観察し、関心を高める。
3	代かき	3・4	みんなで力を合わせ、どろんこになりながら、田をかきまぜる活動を通して、稲作りへの主体的関心を高める。
2	苗取り・苗運び	3	苗の準備をすることで、田植えへの期待と働くことの楽しさを味わわせる。
3	田植え	5・6	みんなで力を合わせ、どろんこになりながら田植えを行い、きれいな水田をつくっていく過程で、働くことの楽しさを味わわせる。
3	田の草取り	5	みんなで協力して植えた苗の成長の様子を観察し、苗がよく育つように草取りをして、田んぼの土の感触や周りの自然にふれる。
3	鳥おどし・かかし作り・設置	1・4	生長しつつある稲の穂を鳥に食べられないように、工夫を凝らしたものを作る。
3	稲刈り	5・6	自分たちでもみから育てた稲を収穫する喜びを味わわせるとともに、農家の仕事や主食である米について、さらに一

			層の関心を深める。 稲刈りの体験を通して、勤労の喜び、尊さや協力の大切さを知る。 秋の自然の様子を観察する。
3	脱穀・稲運び	3	自分達が刈り取った稲が、米になるまでの過程を知るとともに、風力を用いた脱穀の作業を見学する。
3	もみ干し	5・6	自分達が刈り取った稲が米になるまでの過程を知るとともに、作業を通して主食である米を大切に作る気持ちを養う。
2	米の中の石拾い	3・4	収穫に感謝しみんなで喜び合う南本フェスティバルのもちつきのために協力して仕事をする。
4	南本ふれあいフェスティバル	全校	もみまきから稲刈りまで、自分たちで育ててきた稲の収穫をみんなで喜び合う。また、協力していただいた人たちへの感謝の気持ちをあらわす。 家庭で行われなくなった餅つきや伝承遊びなど日本古来の風習に親しみ、その楽しさを味わう。
外部連携 ・水田指導員(1986年以來、本校の教育水田活動を支援してくださっている地域の稲作経験者のグループ) ・NPO 法人 どんこクラブ(こども自然公園指定管理者)			

5 実践と評価

教育水田活動は4月のもみまき(2年)に始まり、5月の苗床草取り(2年)・代かき(3・4年)、6月の田植え(5・6年)と続く。泥んこになって田んぼの中を自由に動き回る代かきは、毎年楽しみにしている子もいるほどである。さらに7月の草取り(5年)、9月の鳥おどし設置(1年)・案山子設置(4年)と、水田活動は毎月続き、いよいよ10月の稲刈り(5・6年)を迎えるが…、今年は台風や長雨の影響で大幅に遅れてしまった。夏の日照不足も心配されたが、幸



い平年並みの収穫となり、12月のフェスティバルでもちつきをし、全校児童がおいしくいただくことができた。また、フェスティバルでは6年生が総合的な学習の時間の単元「こんなに価値がある水田活動」で研究してきた教育水田の歴史や意義を、児童や地域の方に発信した。

年間の活動を通して、児童は毎日食べている米がこれほど多くの手間をかけて作られていることを実感し、食べ物の大切さを意識するようになった。また、代かきの最中にドジョウやアメリカザリガニ

などいろいろな生き物を見つけたり、教育水田の周囲の自然に目を向けたりすることで、水田が生き物のすみかとなっており、周囲の自然ともつながっていることを理解していた。7月に地域の保護団体が行った教育水田付近のホタル観察会に親子で参加した児童もいた。



5年 単元名「三浦宿泊体験学習」(12時間) 総合的な学習の時間・国語・社会科・理科

1 単元設定の理由

5年生は毎年三浦で宿泊体験学習を行っている。従来は野外炊事やシーカヤック体験を中心としてきたが、今年度は5年生の学習内容とより密接に結びついた活動を取り入れるとともに、源流域から河口干潟までの集水域が丸ごと保全されている小網代の森を歩くことで、源流の森と海とのつながりを強く意識させ、学校周辺の自然と関連付けて考えられるように単元を設定した。

2 単元目標

源流域から河口までの集水域を歩いたり、干潟と磯の生物相の違いを比べたりすることで、源流の森と海とのつながりを意識するとともに、海の自然の多様性を理解することができる。

遠洋漁業の基地であるとともに沿岸漁業も盛んな三浦の漁業の特色を知り、漁業を支える人々の工夫や努力について考えることができる。

3 単元の評価規準

- ①集水域の自然の成り立ちや海の自然の多様さを知り、水系を通した海とのつながりを考える。
- ②三浦の漁業の特色を知り、漁業を支える人々の工夫や努力について自分の考えをもつ。
- ③体験学習で得た情報を整理・分析し、相手と伝えたいことを意識して報告書を作っている。

4 単元の指導計画

時	学習活動	指導上の留意点
2	小網代の自然を知る事前学習	小網代野外活動調整会議の方の支援により、スライド等を使って小網代の生物相や集水域の自然のつながり、環境保全の歴史や意義を事前に理解できるようにする。
3	小網代の森自然観察	小網代野外活動調整会議の方の支援により、源流域から川沿いに河口干潟まで歩き、集水域の生物相の豊かさや、川を通した海とのつながりを実感できるようにする。
3	和田長浜海岸の自然観察	磯の生物を実際に手に取って観察し、小網代の干潟とはまた違った生物相の豊かさに気付くようにする。
2	みさき魚市場見学	マグロの産地の表示などに着目させることで、遠洋漁業基地としての三浦の漁業の特色を理解できるようにする。
2	松輪漁港見学	漁船が着岸し、水揚げされる時間に合わせて見学することで、「松輪サバ」としてブランド化し、生き残りをかける漁業者の工夫や、実際の仕事の様子を実感できるようにする。
11	4年生に伝えよう	活動中に撮影した写真をもとに、伝えたい相手を意識して必要な情報を選択し、報告書を作るようにする。

外部連携

- ・NPO 法人 小網代野外活動調整会議(小網代の森での自然観察)
- ・工藤孝浩様(和田長浜での自然観察)
- ・三浦市三崎水産物地方卸売市場(みさき魚市場)
- ・みうら漁協松輪支所

5 実践と評価

「あっ、カニのダンス！」

5年生の子どもたちが干潟をじっと見つめている。はさみを動かし、ダンスをしているのはチゴガニ。

森の中では、道沿いの土手に目をこらす。所々にあいた小さな穴の奥には、赤いはさみのアカテガニ。目が慣れてくると、子どもたちは次々と巣穴を見つけ、そのたびに歓声をあげた。

三浦半島の小網代は、源流域から河口の干潟まで、集水域が丸ごと残された貴重な場所。ここにはチゴガニやアカテガニなどの多様なカニたちがくらしている。中でも森の中に巣穴を掘ってすみ、幼生を放つために海へ下りてくるアカテガニは、集水域の自然を象徴する存在である。子どもたちは小網代野外活動調整会議の方々と源流から海まで歩きながら、海と川、森のつながりを実感することができた。

また、砂浜や磯の生き物を観察するため、小網代から少し離れた和田長浜海岸でも生物観察をした。ここでは、海の生き物の専門家・工藤孝浩さんが自ら海に潜っていろいろな魚を採集し、用意した観察用水槽を使って即席の水族館を作ってくれた。この採集・観察で、小網代の干潟との生物相の違いも理解できた。

みさき魚市場見学では、冷凍された巨大なマグロがごろごろ転がっているさまを見学した。よく見ると、マグロには産地を示すラベルが貼られている。また、輪切りにされた尾の部分を見ただけで品質を判断する仲買人の様子も驚きであった。

社会科の教科書(4年時に使用した)で学習した松輪漁港は三浦半島の先端近くにあり、東京湾でとれたサバを「松輪サバ」として売り出している。漁を終えて帰ってくる時間は事前に聞いていたが、ほぼ予定通りに着岸した漁船から次々に水揚げされるとれたてのサバを児童は興味津々で見つめた。そのサバが漁港の作業場で手際よく仕分けされ、「松輪サバ」として次々に箱詰めされていく様子も新鮮だったようだ。漁船の乗組員も作業場で働く人も若い人が比較的多いのが目についた。4年生の時に三浦市についての学習の中で松輪漁港の取り組みを知り、5年生では産業学習の一環として漁業について学んでいる児童にとって、これはまさに「生きた教科書」であった。

体験学習から帰った後は、活動中に各班で撮影した写真をタブレットに取り込み、プレゼンテーションソフトを使って報告書を作った。4年生に伝えるという目的を考え、伝えたい情報を取捨選択しながら内容を考えることができた。

これまでの宿泊体験学習は文字通り「体験」中心であったが、今年度の活動は「学習」中心である。教科書を使った机上の学習でなく、実際に集水域を歩いたり、磯の生物を採集したり、漁業の様子を見学したりする「体験」を通して、児童は海の自然や漁業についてより深く理解し、森と海、自然と人のつながりを意識できるようになった。



5年 単元名「帷子川環境学習」(11時間) 総合的な学習の時間・理科

1 単元設定の理由

三浦宿泊体験学習を経験した5年生は、水辺の自然への関心をさらに深め、川と海のつながりも意識するようになった。そこで、自分たちのまちを源流の一つとする帷子川に着目し、理科の学習「流れる水」と関連付けながら上流・中流・下流の生物相や河川の特徴をとらえ、学校周辺の自然とも結びつけて考えられるように単元を設定した。

2 単元目標

体験を通して帷子川の上流・中流・下流の生物相や河川の特徴をとらえ、それぞれを比べたり、生物と環境の関連性を考えたりすることで、川の自然の多様性や学校周辺の自然とのつながりを理解することができる。

3 単元の評価規準

- ①帷子川の上流・中流・下流の生物相や河川の特徴をとらえ、それぞれを比べたり、生物と環境の関連性を考えたりすることができる。
- ②体験を通して自分たちが住むまちの身近な自然に興味をもち、生き物と海や川の手ながりを意識する。

4 単元の指導計画

時	学習活動	指導上の留意点
1	帷子川の自然を知る事前学習	どろんこクラブの方の説明により、帷子川の上流・中流・下流の生物相や河川の特徴を、理科の学習「流れる水」と関連付けながら事前に理解できるようにする。
5	帷子川自然観察(1)	帷子川の旧河道を利用した親水公園で生物採集を行い、どろんこクラブの方の支援により、中流域の生物相の特徴を実感できるようにする。
3	帷子川自然観察(2)	帷子川の汽水域で生物採集を行い、ココペリプラスの寺田さんの支援により、中流域とはまた違った生物相の特徴に気付くようにする。安全に留意し、川の中には入らないようにする。
2	帷子川の生き物を知る事後学習	ココペリプラスの寺田さんの支援により、帷子川で採集された生物を観察し、これまでの学習内容について理解を深める。
外部連携 ・ココペリプラス(自然環境学習の企画・運営) ・NPO 法人 どろんこクラブ(こども自然公園指定管理者)		

5 実践と評価

本校がある場所は、帷子川水系の源流域のひとつにあたる。足もとの学校から地域の自然を見つめなおすとともに、源流域から海までの自然と人とのつながりをとらえ直すために、地域の NPO「どろんこクラブ」や自然環境学習の企画・運営を行っているココペリプラスの協力を得て、ふるさとの川である帷子川についてより深く知る「帷子川環境学習」を行った。この学習では、川と海の間や特徴的な生物について映像や実物で紹介したり、実際に川に入って生き物を採集したりした。



帷子川は住宅地の中を流れているが、上流域にはギバチのような希少な魚が生息しており、近年はアユも遡上している。実際に川に入ってみると、瀬や淵に加えて底質が泥の場所や岩盤の場所、湧水が入って水温が低い場所など、様々な環境があり、それが豊かな生物相を支えていることがわかる。

第1回目の帷子川旧河道を利用した親水公園では、児童は文字通り川にどっぷりつかって生物の観察・

採集に没頭し、意外なほど多様な生物を見つけることができた。

また、帷子川は小さい川で、意外なほど上の方まで海水が入ってくるため、海の魚と川の魚が両方生息している。

第2回目の星川駅付近では、ココペリプラスの寺田さんが投網で捕まえた魚や、児童が釣り上げた魚を観察すると、ボラなどの汽水域にすむ魚がたくさん混じっていた。とれた生き物を通して、帷子川の生物相の豊かさや川と海の間を実感することができた。



2回の観察会に加え、事後学習で寺田さんが採集して学校に持ってきた帷子川の魚介類を観察し、さらに詳しい解説をしていただいた。観察用に作られた特別な水槽を使うと、魚を横からよく見るできるので、まるで写真の図鑑を見るかのように観察できた。



実際に川へ入ったり、釣りに挑戦したりといったこれら一連の活動を通して、児童は今まで以上に生き物が好きになった。また、帷子川を上から下まで(淡水域から汽水域まで)実感的に知ることで、川という環境の多様性や海との関わりの深さ、自分たちの住むまちとのつながりについても意識することができるようになった。

5年 単元名「JAMSTEC 見学」(2時間) 総合的な学習の時間・理科

1 単元設定の理由

5年生の児童は、三浦宿泊体験学習を通して海の生き物に親しむとともに、集水域という単位で海と山、川をつながりを体験的に理解している。ただし、児童が見たり触れたりしたのは、干潟や磯など沿岸部の海の自然であって、広い海の世界やその地球規模の動態については実感が難しい。

そこで本単元では、海洋に関する学術研究を行っている海洋研究開発機構(JAMSTEC)を見学し、最新の研究成果の展示や演示実験の見学を通して、海やその地球規模の変化、海の生物に関心を深められるようにした。

2 単元目標

海洋における研究の取り組みを知り、そこへつながる身近な環境を大切にしようとする。

3 単元の評価規準

- ①海洋における研究の取り組みに興味をもち、積極的に見学している。
- ②JAMSTEC 見学を通して、海やその地球規模の変化、海の生物に関心を深めている。

4 単元の指導計画

時	学習活動	指導上の留意点
2	JAMSTEC 見学	館内でのマナーに留意しながら諸施設を見学し、海洋の地球規模の動態や深海の生物相について知るとともに、身近な環境についても考えるきっかけとする。
外部連携 ・海洋研究開発機構(JAMSTEC)		

5 実践と評価

神奈川県横須賀市に本部がある JAMSTEC は海洋に関する研究開発を行う機関であり、学術研究船「白鳳丸」や地球深部探査船「ちきゅう」、潜水調査船「しんかい 6500」などを保有している。今回は付属する横浜研究所内の地球情報館を見学した。

始めに JAMSTEC の概要や研究内容についてビデオで学習した後、所内の施設を見学した。地球を模した直径3mの半球スクリーンでは、「海面の温度分布」や「四季の雲の動き」などを、宇宙から眺めているかのように見ることができた。気象や海流などが地球規模で動いていることがよく理解できる展示であった。同じ場所にあるメインスクリーンでは、実物を見るのが難しい様々な深海生物の映像を、児童は惹きつけられるように見ていた。



玄関ホールでは深海の環境に関する演示実験を見学した。深海といえば児童には「光が届かない場所」「深海魚がすんでいる」といった知識はあるが、実際にどのような環境であるかはイメージできない。この実験では、特殊な厚手の水槽にポンプで圧力をかけ、深海中の高い水圧を再現する。水槽の中に入れたカップラーメンの容器が見るうちに小さく圧縮され、水圧を抜いても元に戻らない様子に、児童は口をあぐり。こんな環境に深海魚は泳いでいるんだ！

見学を通して、児童は海が地球規模でつながり、様々な影響を受けたり与えたりしていることや、自分たちの知っている海が深海とつながっていること、海の自然の多様さを知ることができた。

5年 単元名「地域の自慢の南本小をARアプリでアピールしよう！」(44時間)総合的な学習の時間・国語・理科

1 単元設定の理由

これまで川や海とつながる様々な活動に取り組んできた5年生は、それと並行しながら、学校やその周辺の生き物について調べたり、地域の水辺環境を再現したビオトープを作ったりしてきた。取り組みへの満足が高まるにつれ、児童の中には次第に、「この学校や周辺の自然のよさをみんなに伝えたい」という思いが高まっていった。

本単元では、「デジタル図鑑」を作ってARアプリで保護者や地域の方に伝える活動を通して、地域の自然の豊かさや水辺を通したつながりを改めて実感するとともに、地域や学校を誇りに思い、この環境を守るために進んで行動できるようにしたいと考えて設定した。

2 単元目標

南本宿小学校の自然の豊かさを、情報機器などを積極的に用いて保護者や地域の方にアピールする活動を通して、生態系の一員としての生物の存在およびその多様性や連続性について知るとともに、地域に生きる一員として南本宿小学校を誇りに思い、この環境を守るために進んで行動できるようにする。

3 単元の評価規準

- ①学校周辺の自然について調べ、紹介するために、パソコンやタブレット端末など、多様な情報機器を活用し、必要な情報を集めるとともに、自分たちの考えを表現する手段とする。
- ②学習を通して地域の自然の豊かさや水辺を通したつながりを実感し、それを守るために、地域の方と協力しながら進んで活動する。

4 単元の指導計画

時	学習活動	指導上の留意点
10	南本小の自然を味わい尽くそう	南本小の自然をくわしく調べ、記録に残すとともに、五感を使ってフルに自然を味わう。子どもたちが南本の自然を満喫できるよう、十分な探索と話し合いの時間を確保する。専門家の助言を受けながら、「大池の自然を再現する」という目標に沿ってビオトープを造成・改良する。
18	これまでの活動をデジタル図鑑にまとめよう	これまで収集した情報をもとに、南本小の自然の魅力を考えさせ、相手を意識させながら伝えたい内容を絞り込む。完成形のイメージをもって活動できるようにするとともに、その進み具合を適宜自分たちで確認できるようにする。
16	南本小の自然をアピールして「自慢の学校」と思ってもらおう	「マチアルキ」を活用し、学校の自然をアピールするガイドツアーを行う。相手に合わせた招待の仕方やガイドツアーの内容を考える。子どもたち自身で話し合いを進めることで、「自分事」としての思いを高められるようにする。

外部連携

- ・ココペリプラス(自然環境学習の企画・運営)
- ・NPO 法人 どんこクラブ(こども自然公園指定管理者)
- ・NPO 法人 よこはま里山研究所(NORA) 島村雅英様(ビオトープアドバイザー)
- ・東京書籍株式会社(ARアプリ マチアルキ)

5 実践と評価

三浦宿泊体験学習や帷子川環境学習などの活動に加え、4年時から「総合的な学習の時間」で地域の自然に親しんできた5年生は、生き物とそのつながりに高い関心をもっている。その彼らが「学校やその周辺の自然のよさを伝えたい」と考えるのは自然な流れであった。

また、デジタル図鑑作りに近い活動にはすでに三浦宿泊体験学習の中で取り組んでいた。各班がデジカメを1台ずつ持ち、生物や活動の様子を撮影する。これをタブレットに取り込み、プレゼンテーション用ソフトを使って4年生に伝えるという活動である。



そこで本単元では、「デジタル図鑑」を作って保護者や地域の方に伝える方法が選ばれたが、それを形にする具体的な方策として「マチアルキ」(東京書籍)という AR アプリを活用することにした。これは、位置情報と関連付けた所定の画像をタブレットのカメラに映すことで、画面に新たなデジタル情報を映し出すことができるものである。たとえばタブレットをビオトープの看板にかざすと、そこにいる魚などの写真や情報が映し出される。これを持ち歩けば、水族館等で使われているようなセルフガイドとして使えるわけである。そのために、本プログラムの助成金を活用してタブレットや野鳥観察用のスコープ、カメラ等を新たに購入することにした。

本校のビオトープは、ビオトープアドバイザーの島村雅英さんやどろんこクラブの協力を得て、帷子川水系の源流の一つである大池の自然をモデルとして造成し、実際に大池で採集した魚介類を導入している。従って、それ



自体が生きた「大池周辺の生物図鑑」なのである。児童はこのビオトープとその周辺の生物や、帷子川水系の生物の写真を撮りため(教師が提供したものもあるが)、まずはデジタル図鑑としての情報を収集した。次に、AR アプリ「マチアルキ」に載せるコンテンツについて話し合い、使用する写真や説明の内容を検討した。使える写真の枚数や文字の時数には当然ながら制限があるので、何でもかんでも載せるわけにはいかない。そこで情報の整理・分析を行い、「この学校やその周

辺の自然のよさをみんなに伝える」ために必要なものが絞り込まれる。これを位置情報と関連付ければ、ビオトープという「生きた図鑑」に文字情報や生物の写真が加わり、「デジタル図鑑」が完成する。

当初、児童はガイドツアーの参加者にタブレットを持ち歩いてもらい、セルフガイドとして活用することを考えていた。ところが、実際に地域の方を招待してみると、「マチアルキ」を媒介にして「お客様」と会話しながら歩くことの方に児童は魅力を感じた。タブレットをセルフガイドとして使うのとは違って、直接リアクションが返ってくるからだ。しかもそれは、ビオトープや「デジタル図鑑」についての意見や感想にとどまらず、「学校ができる前はね…」「昔はこんな生き物もいたんだよ」といった情報提供であったり、児童とその活動への称賛であったりした。これらは生の手ごたえであり、これまで取り組んできた活動への自信にもつながった。ここで得られたフィードバックを生かして「マチアルキ」のコンテンツやガイドツアーのやり方を見直し、次の幼保小交流では地域の幼稚園児・保育園児を案内した。さらに自分たちの保護者にも、一人ひとりがビオトープや「マチアルキ」の魅力を伝える招待状を書いて、第3回のガイドツアーを行った。



ビオトープづくりは、水系を意識しながら地域の自然をとらえ直し、改めて実感する活動であった。また、「デジタル図鑑」を作りこむ活動を通して、児童は伝える相手を意識しながら、「自分たちが本当に伝えたいこと、大切なことは何なのか」と考え、地域の自然の特徴や魅力をさらに深く理解することができた。また、自分たちが作ったビオトープを案内することを通して、児童は地域や学校を誇りに思い、地域の自然環境を再現・紹介した自分たちの活動にも自信を深めることができた。

2年 単元名「新江ノ島水族館見学・海の観察」(4時間) 生活科・国語

1 単元設定の理由

2年生の児童は、国語の教材「スイミー」を読んで海の生き物に興味を持っている。そこで、「スイミーでべんきょうした生きものをさがして、海の生きものにくわしくなろう！」と児童に投げかけ、国語の学習をきっかけに海の生き物に親しむ単元を設定した。新江の島水族館の見学だけでなく、近隣の砂浜を散策し、貝拾いなどの活動を通して、海の自然を実感できるようにした。

2 単元目標

水族館の見学や砂浜の散策を通して、海の生き物や自然に親しむことができる。

3 単元の評価規準

- ①国語の教材をきっかけに海の生物に興味をもち、積極的に見学している。
- ②水族館見学や砂浜散策を通して、海やその生物に親しんでいる。

4 単元の指導計画

時	学習活動	指導上の留意点
2	新江ノ島水族館見学	国語の教材「スイミー」をきっかけに、「スイミーでべんきょうした生きものをさがして、海の生きものにくわしくなろう！」と動機付け、目的意識を持って見学できるようにする。 また、「海の生きものカード」を用意し、見つけた生物を記録できるようにする。
1	砂浜散策	砂浜を歩く感触や貝殻の手触りなど、五感を活用して海の自然に親しむようにする。
1	振り返り	絵日記を書く際、水族館で見た生物や砂浜散策で見つけたものなどを想起させるようにする。

外部連携
・新江ノ島水族館

5 実践と評価

「水族館行くの楽しみだなあ」「早く行きたいな」

うれしそうな声が集合場所にあふれた。横浜は海辺の都市だが、本校のある旭区は海から離れた丘陵地にあり、日常的に海に触れる機会はない。児童にとって、海は特別な場所なのである。

新江の島水族館では、環境別に整理された展示を見ながら、興味をひかれた生物

の特徴や絵をカードに書きとめる姿が見られた。また、砂浜散策では、ビニル袋を持って歩きながら、さかんに貝殻などを拾い集めていた。

見学の後は、水族館で見た生き物や砂浜散策で見つけたものなどを絵日記に書き、活動を振り返った。

国語の「スイミー」をきっかけにしたこの活動を通して、児童は海の自然に興味を持ち、いろいろな生物について知ることができた。



4年 単元名「横浜港見学」(4時間) 社会科

1 単元設定の理由

4年生は社会科の学習の一環として、毎年横浜港周辺を見学している。しかし、これまでは神奈川県警察本部や横浜市都市発展記念館等の施設見学が主で、海の近くに来ていながら海をほとんど見ずに終わっていた。

そこで今年度は横浜港の港湾としての機能(むしろこちらのほうが本来の機能であるが)に焦点を当て、実際に船で港内をめぐり、港湾施設や荷役の様子を見学して、現在の横浜港の様子を実感するとともに、海の自然を実感できるようにした。

2 単元目標

横浜港や横浜みなと博物館の見学を通して、貿易港としての役割や工夫を知り、自分たちの住む横浜市や海への関心と理解を深め、これからの学習に役立てる。

3 単元の評価規準

- ①横浜港の貿易港としての役割に興味をもち、積極的に見学している。
- ②横浜港や横浜みなと博物館の見学を通して、海に親しんでいる。

4 単元の指導計画

時	学習活動	指導上の留意点
2	横浜港内見学「海の教室」	海中への落下防止や船酔い等の健康観察に留意しながら、船で横浜港内をめぐり、埠頭の施設などを海上から見学することで、貿易港としての横浜港の機能が理解できるようにする。また、海の自然にふれ、横浜が海に開かれたまちであることを実感できるようにする。
1	横浜みなと博物館見学	港内見学で見聞したことを想起しながら横浜港の港湾施設や貨物船などの展示を見学することで、貿易港としての横浜港の機能について理解を深める。
1	学習の振り返り	教科書や副教材を用いて見学を振り返り、貿易港としての横浜港の機能についてさらに理解を深める。
外部連携 ・公益社団法人関東海事広報協会 ・横浜みなと博物館		

5 実践と評価



今回の社会科見学は、関東海事広報協会が実施する「海の教室」に参加する形で行った。帆船日本丸の近くの遊覧船発着所に集合し、関東海事広報協会の講師によるオリエンテーションの後、小さな船に乗船。出発前には「船は沈むかもしれないから怖い」と不安がっていた児童も、船が波の静かな港内を走り出すと、「あ、意外と気持ちいいかもしれない」と笑顔になる。

船は外国の客船が着岸する大棧橋や氷川丸の前を通り、ベイブリッジの真下をくぐって、普段は立ち入ることができない本牧埠頭周辺を海上から見学する。巨大なキリンのようなガントリークレーンを、児童は驚きの目で見つめる。係留されている貨物船は、船尾に記されたローマ字から外国籍であることがわかる。ヘルメットをかぶった作業員や、時折すれちがうタグボートの船員が手を振ってくるのに、嬉しそうに手を振り返す児童たち。同行した関東海事広報協会の講師が詳しく説明してくれるが、児童にとってはそれよりも船の大きさやガントリークレーンの動く様子、海の匂いや潮風の冷たさが五感を通して心に残っているようだった。いずれにせよ、屈指の貿易港として世界とつながる横浜港の様子を目の当たりにし、横浜港の機能を理解するとともに、こんなにも身近に海があり、自分たちが住んでいる横浜が海に面したまちであることを実感できた船の旅であった。

港内見学を終えて上陸した後、すぐ近くにある横浜みなと博物館を見学した。ここには横浜港の歴史に関わるものやコンテナ船・自動車運搬船などの模型、昔の荷役の様子を再現したジオラマなどが展示されており、先ほど見学した横浜港内の施設や船について理解を深めることができた。ガントリークレーンによる荷役の動く模型もあり、児童はこれを操作することで、船上や埠頭に山積みされていたコンテナとクレーンの関係を理解することができた。また、何気なくキッチンに展示された食事の模型は、実はその多くが輸入品であることがわかるようになっており、自分たちの生活が海を介して世界とつながっていることに気付かされた。



社会科の学習は実際に見聞することによってこそ理解が深まるが、学年が上がるにつれて日常生活から遠くなり、実感するのが難しくなる。同じ横浜市に住んでいても、港湾としての側面は日常生活に直結しないため、社会科の教科書や副教材では「自分ごと」として理解することが難しかった。この社会科見学を通して、児童はこれまで知らなかった横浜港の港湾機能を知り、貿易港として世界につながっていることを実感することができた。また、自分たちの生活の多くが輸入に頼っていることから、海を介した世界とのつながりや輸送経路としての海についても知る事ができた。ただし海の自然については、場所や時間の制約もあり、十分に見聞することができなかった。

個別支援学級 単元名「三浦合同宿泊学習」(4時間) 生活科・総合的な学習の時間

1 単元設定の理由

本校の個別支援学級の児童は3学級 12名。様々な個性を持った子どもたちだが、1年生から6年生までとても仲が良く、お互いが助け合いながら学習や体験的な活動に取り組んでいる。中には虫が苦手だったり、音や触覚に過敏だったりする児童もいるが、海の生物には興味を持っている児童が少なくない。

宿泊学習の本来の目的は「自分の身の回りのことは自分です」「友達同士が仲良く協力し助け合う」ことだが、ここでは京急油壺マリンパークの見学を通して、海の生物を間近で見たり触れたりする機会を設け、海とその生物に親しみを感ぜられるようにした。また、宿舎近辺の砂浜を散策し、貝拾いなどの活動を通して、海の自然を実感できるように計画した。

2 単元目標

水族館の見学や砂浜の散策を通して、海の生き物や自然に親しむことができる。

3 単元の評価規準

- ①海の生物に興味をもち、積極的に見学している。
- ②水族館見学や砂浜散策を通して、海やその生物に親しんでいる。

4 単元の指導計画

時	学習活動	指導上の留意点
2	京急油壺マリンパーク見学	水槽展示だけでなく、タッチプールで実物に触れ、五感を通して海の生物を知ることができるようにする。
1	砂浜散策(雨天中止)	砂浜を歩く感触や貝殻の手触りなど、五感を活用して海の自然に親しむようにする。
1	振り返り発表	水族館見学等で印象に残ったことを発表する。

外部連携
・京急油壺マリンパーク

5 実践と評価

京急油壺マリンパークといえば、イルカやアシカのショー。しかし、水族館の魅力はそれだけではない。

水族館の入口にある巨大なムカシオオホホジロザメのあご(復元模型)の前で、まずは記念撮影。そこから館内に…は入らず、入口横のタッチプールに向かう。最初のプールにはネコザメがいて、水面に頭をもたげて歓迎?してくれる。子どもたちも思わず笑顔になる。はじめはおそるおそる、大丈夫だとわかると次々に、ネコザメの背中に触れてみる。硬くてザラザラした、鮫肌独特の感触だ。次のプールには巻貝やウニ。とげだらけのムラサキウニに目を丸くしながら、水中に手を突っ込んでいる。短い時間だったが、海の生物に触れる貴重な機会となった。

水族館内にはテーマごとに工夫をこらした水槽が並んでいる。回遊水槽では大きなシロワニや吻先ののこぎりが特徴のノコギリエイ(児童はノコギリザメだと思っていたが)に注目が集まった。また、ダイオウイカやメガマウスザメの巨大な標本も驚きだった。

2日前に直撃した台風の余波で残念ながら砂浜探索が実施できなかったが、この活動を通して、児童は海の自然に興味を持ち、五感を通して海の生物に親しむことができた。



1 単元設定の理由

今年度、海から学校まで様々な場所で活動してきた5年生は、川と海のつながりや地域の自然との関係も考えられるようになった。しかし、全校としてはこれらのつながりを意識できるようにはまだなっていない。そこで、今年度の活動のしめくりとして、自分たちのまちを源流の一つとする帷子川に着目し、大池や教育水田とのつながりを意識しながら、上流・中流・下流の生物相や河川の特徴をとらえ、海から川を通して源流域までをひとつながりの自然として考えられるように、ミニ水族館の展示を計画した。見学時間は随時とし、中休みにクイズも実施した。

2 単元目標

帷子川ミニ水族館の見学やクイズへの参加を通して、帷子川の上流・中流・下流の生物相や河川の特徴、海との関係をとらえ、学校周辺の自然とのつながりを理解することができる。

3 単元の評価規準

- ①大池や帷子川の生物に興味をもち、積極的に見学したり、クイズに参加したりしている。
- ②帷子川の上流・中流・下流の生物相や河川の特徴、海との関係をとらえ、学校周辺の自然とのつながりを理解することができる。

4 単元の指導計画

時	学習活動	指導上の留意点
1	帷子川ミニ水族館見学	帷子川の上流・中流・下流及び大池の生物相や河川の特徴が分かるように水槽を分けて設置し、低学年の児童にも分かりやすい解説パネルをつける。
	水族館クイズ	参加者全員が満足でき、かつ帷子川の自然について理解が深まるような問題を用意する。
外部連携 ・ココペリプラス(自然環境学習の企画・運営)		

5 実践と評価

「ホトケドジョウのひげは、1、2、3、…8本だ！」

水槽に顔をくっつけるようにのぞきこんでいた児童が目を輝かせた。

本校図書館前の廊下に水槽を設置する時から「何だろう」と気になっていた児童たちは、中休みになるや否や展示にかじりついた。しめしめ、「入れ食い」だ。図書館を会場にしたクイズと解説は本校卒業生のスタッフが担当する。こちらはたちまち長蛇の列。中休みが終わっても全員はさばききれず、大好評のため第2回・第3回をアンコール開催することになった。ミニ水族館自体も開催期間を延長した。



クイズの問題は低学年でも解けるように簡単なものにしたが、実際に水槽の中の魚や解説パネルを見ないと正解できない。クイズに答えることで、児童は水族館の展示の内容をより深く理解するとともに、帷子川にすむ生き物の特色や貴重性、海とのつながりを知ることができた。

なお、この活動は地域の「タウンニュース旭区版」にも掲載された。

今年度の実践

1 計画からの追加・変更点

当初の計画のうち、「海辺体験」(2・4・5年)と「教育水田活動」については、ほぼ予定通り実施することができた。ただし4年生の「都市の海の観察」については、教科の学習内容とのかねあいから、貿易港としての横浜港を見学することで海とのつながりを実感することが主眼となり、時間の制約もあって人工干潟の見学等については割愛せざるを得なかった。また、5年生の JAMSTEC 見学と個別支援学級の水族館見学も報告書に追加した。

「源流の自然」については、多少の内容の変更はあるが、これもほぼ予定通り実施した。ただし5年生の活動は当初予定した大池ではなく、活動範囲を大幅に広げて「帷子川環境学習」とし、大池の自然をモデルにした学校ピオトープから大池、帷子川を経て海までのつながりを一層強く意識したものとなった。

「帷子川源流域の生物誌作成・こども自然公園での情報発信」については、「帷子川環境学習」の一環として「帷子川源流域(学校周辺)のデジタル図鑑作成・AR アプリによる情報発信」に切り替えた。これは5年生の活動が前述したように広がり、活動の中心も大池ではなく学校周辺となったためである。

全体としては5年生の取り組みが中心となり、当初計画より大幅に拡大したため、共同実施機関についてもそれに合わせて変更した。情報発信も前述のように AR アプリを活用するとともに、「タウンニュース」や「教育家庭新聞」の取材を受け、地域や教育関係に向けて発信した。

一方、全校での取り組みとしては当初「教育水田活動」だけで、「川を通した海とのつながり」を全校児童が意識するには弱いところがあった。そこで、計画していた大日本水産会の「おさかな学習会」に代えて、ココベリプラスに協力していただき「帷子川ミニ水族館」を開催した。これは、実際に大池を含む帷子川流域で採捕した魚介類を上流・中流・下流・大池周辺に分けて展示し、期間中にクイズも行うもので、「おさかな学習会」(1日限り)より長く10日間実施することができた。

2 実践の成果

本校は帷子川の源流域にあり、里山の谷戸田で全校児童が米作りに取り組んでいる。しかし、これまでは「米を作る」活動そのものに重きを置いていたため、田んぼやその周りの自然に目を向ける機会はほとんどなかった。まして、川や海とのつながりを意識することもなかった。

しかし、今年度の諸活動を通して、私たちのまちの自然は単独で存在するのではなく、川を通して海とつながっていること、ごく身近なところまで海の影響が及んでいることを子どもたちは学ぶことができた。今までただ「森」「田んぼ」「池」としか見えていなかった大池公園の自然も、実は海につながる広大な集水域の一部なのである。特に5年生は、小網代の森や帷子川での体験から、源流域の豊かな森を育むことの大切さを実感していた。

また、子どもたちの中に自然を見る「目」が芽生えたことも挙げておきたい。たとえばボラは汽水域の魚だから、ボラがいる場所には海水が入ってきている可能性があると考えられる。また、ホトケドジョウは同じ川の中でも湧水が流れ込むような、やや水温の低い場所とれる傾向がある。ただ「魚がとれた」ではなく、名前や生息環境を知ること、これから身のまわりの自然を見る目は確実に変わる。「ミニ水族館」のクイズでホトケドジョウのひげの数を数えた児童が教育水田活動で田んぼに入った時、ドジョウの仲間を見つけたら、やっぱりひげを数えて「ホトケドジョウ、見つけた！」あるいは「…と思ったらドジョウだった！」と叫ぶかもしれない。どちらの結果にせよ、児童はそのドジョウの仲間から、「ここは泥っぽいから、ドジョウしかいないのかな。じゃあ横の用水路はどうだろう？」「帷子川でとれたホトケドジョウは、ここと似た様子の場所にいたはずだ」などと、その生息環境にも思いをはせるはずである。そして、単に「ホトケドジョウ＝希少種」というとらえ方ではなく、「ホトケドジョウを守るためには、その生息環境を守ることが大切だ」という考え方に至るだろう。これもまた、生物を川や海などの環境のつながりでとらえる考え方である。

この1年間、中心となって活動した5年生は、源流域から海までの自然に深く関わり、豊かな体験を重ねてきた。

その結果、流域のつながりを意識して自然環境をとらえる見方を獲得するとともに、上述のような自然を見る「目」がどの学年よりも育っている。さらに、学校周辺の自然を調べたり、ビオトープを作ったり、それらを地域の人に伝えたりする活動を通して、地域の自然の特徴や大切さを深く理解するとともに、誇りを持ってそれを伝えようとする態度が育ってきたことを最後に特筆しておきたい。

3 次年度への課題

今年度の実践を通して、本校の児童は前述のように「自分たちのまちの自然は単独で存在するのではなく、川を通して海とつながっていること」を理解することができた。

しかし、各学年の指導計画とのかねあいで、学年によって活動内容は異なっており、海や川に関わる様々な体験をした5年生とそれ以外の学年では、思考の深まりや自然への思いに温度差があることは否めない。

今まで5年生は学びの成果を地域の人や家族、幼稚園児等に伝えてきているが、校内においてどのように発信し、共有化するかが今後の課題である。たとえば来年度三浦宿泊体験学習に行く4年生(新5年生)に、オリエンテーションとして自分たちの経験を伝えることは可能であろう。また、5年生が作った学校ビオトープは、放っておけば荒廃し、そこに込められた意味や思いも忘れられてしまう。これは学校ビオトープでよくある失敗である。そうならないためには、5年生が主体となってビオトープの目標としたものや価値を在校生に伝え、維持管理を引き継ぐ体制を作る必要がある。維持管理だけなら委員会活動の仕事にすればよいが、全校の児童がビオトープを大切に思い、かつ気軽に利用するようにならなければ意味がないのである。

ところで、これまで本稿では断りなしに「自然」という言葉を使ってきたが、本校がある帷子川水系の源流域は、近年まで丘陵地の雑木林と谷戸田が組み合わさった里山であり、教育水田とその周辺の雑木林はその名残である。里山の自然は原始林のそれとは違い、雑木林は薪炭やシイタケ栽培のための伐採・萌芽更新、谷戸田は水田耕作といった人の営みによって維持されている。このあたりのことは4年生が総合的な学習の時間に学習したが、「人の営みも自然と深くかかわっている」という視点も共有されるべきである。自分たちの米作りが周りの自然や川、海とどのようにかかわっているのか、そのような視点からもっと掘り下げてみる必要があると思っている。

主な連携機関及び内容

・南本宿小学校水田指導員(全校)

塩水選に始まり収穫・脱穀まで、稲作活動のすべてにわたって準備・作業支援・助言をいただいた。

・NPO 法人どろんこクラブ(こども自然公園指定管理者)(5年)

こども自然公園・大池での生物観察・採集や学校ビオトープ作りに関して、作業の補助や助言をいただいた。

・NPO 法人よこはま里山研究所(NORA) 島村雅英様(ビオトープアドバイザー)(5年)

学校ビオトープ作りに関して、作業の補助や助言をいただいた。

・NPO 法人小網代野外活動調整会議(5年)

小網代の森での自然観察で同行していただき、援助や助言をいただいた。

・工藤孝浩様(5年)

和田長浜での自然観察で、現地で生物を採集して展示したり、児童の生物観察を支援したりしていただいた。

・ココペリプラス(自然環境学習の企画・運営)(5年・全校)

帷子川環境学習での生物観察・採集や帷子川ミニ水族館の設置でご協力いただいた。

・東京書籍株式会社(5年)

AR アプリ「マチアルキ」を提供していただいた。

・公益社団法人関東海事広報協会(4年)

横浜港見学の企画・案内でご協力いただいた。

2年生「地域の自然や海とつながる教育水田活動」

【実践のねらい】

本校ではこの30年来、教育水田活動を実施し、全児童が稲作を体験している。教育水田は帷子川水系の源流域の里山にあり、この水が田をうるおし、帷子川を流れてやがて東京湾に注ぎ込む。自分たちの教育水田活動が川を経て海とつながっており、源流域の豊かな森を育むことで豊かな海の再生が可能であることを、実際の体験を通し学習するようにし、成果を地域に広げたい。

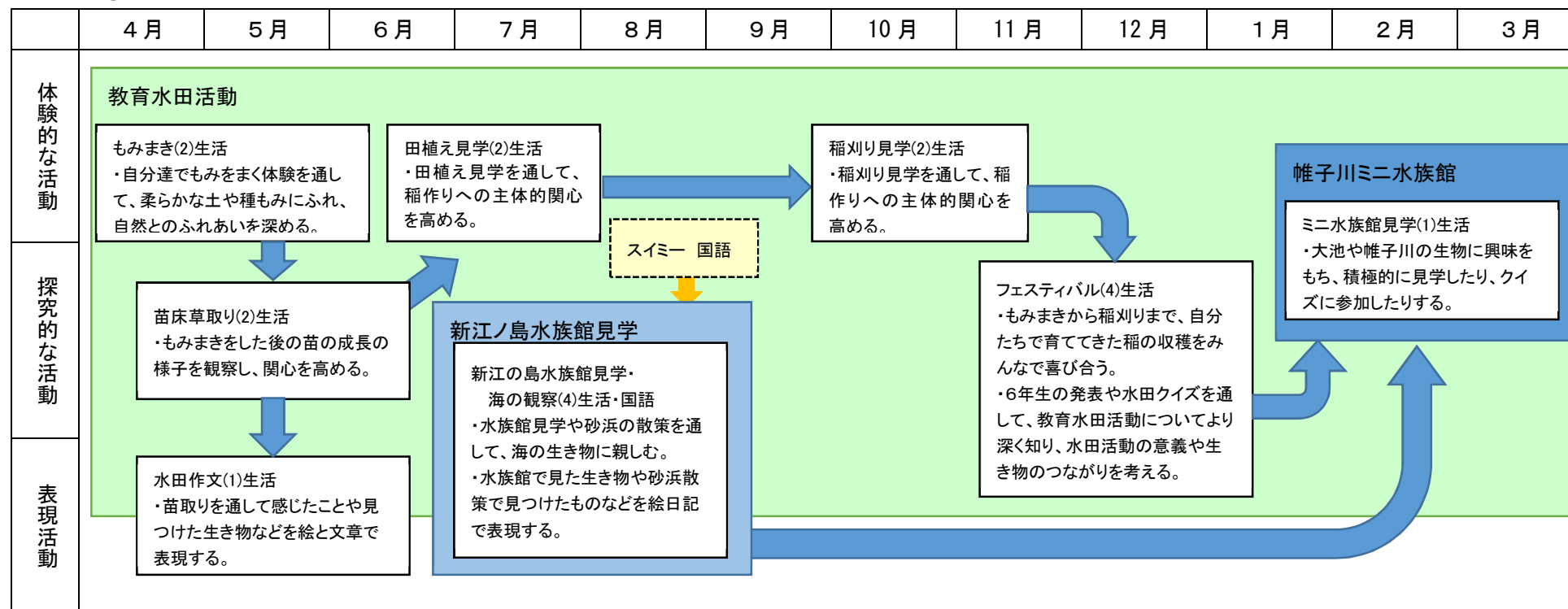
この活動は、教育水田活動を核としながら、各学年ごとに川や海辺の自然に親しみ、それらのつながりを実感できるようなプログラムと組み合わせ、「わたしたちの住むまちの自然は、川を通して海とつながっている」ことを意識させるものである。

○時数 4月～2月（生活科16時間 国語1時間）

○関連 国語

○目標 ①稲作体験を通して地域の自然や人とかかわる中で、教育水田やその周囲の自然に興味をもち、水系を通した川や海とのつながりを考える。

②水族館の見学や砂浜の散策を通して、海の生き物や自然に親しむことができる。



4年生「地域の自然や海とつながる教育水田活動」

【実践のねらい】

本校ではこの30年来、教育水田活動を実施し、全児童が稲作を体験している。教育水田は帷子川水系の源流域の里山にあり、この水が田をうるおし、帷子川を流れてやがて東京湾に注ぎ込む。自分たちの教育水田活動が川を経て海とつながっており、源流域の豊かな森を育むことで豊かな海の再生が可能であることを、実際の体験を通し学習するようにし、成果を地域に広げたい。

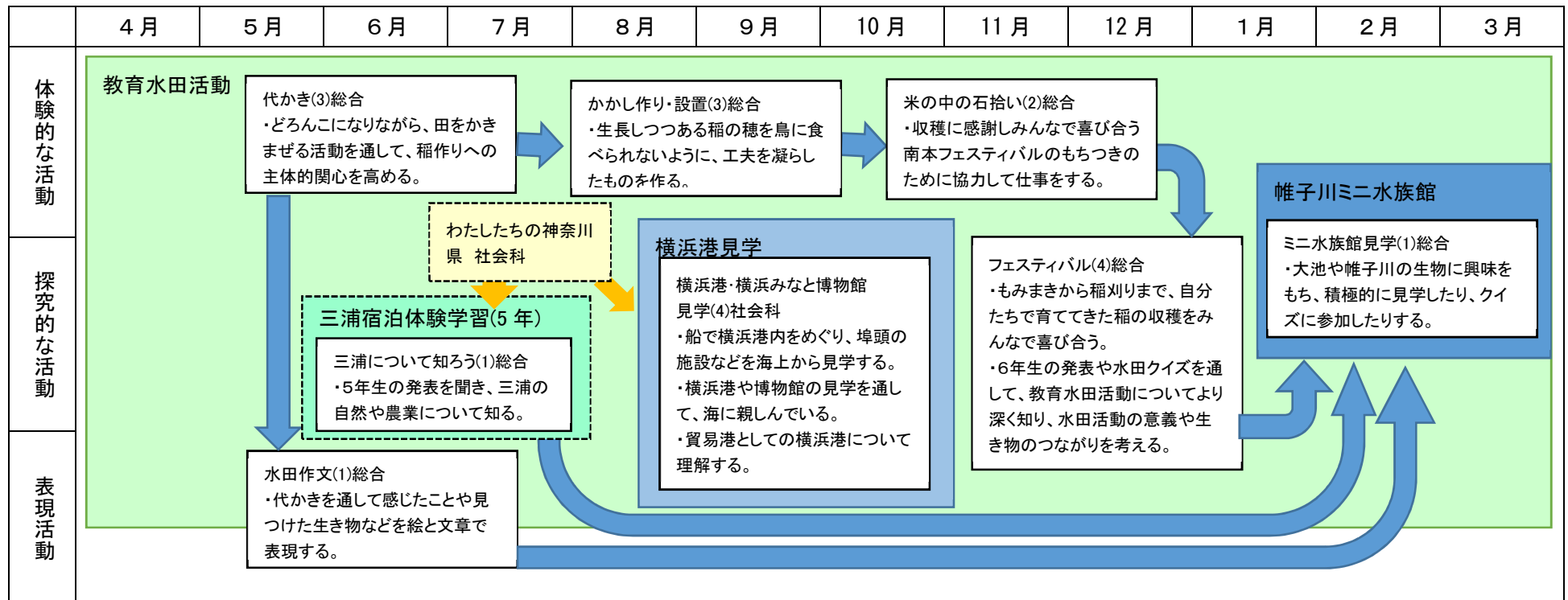
この活動は、教育水田活動を核としながら、各学年ごとに川や海辺の自然に親しみ、それらのつながりを実感できるようなプログラムと組み合わせ、「わたしたちの住むまちの自然は、川を通して海とつながっている」ことを意識させるものである。

○時数 4月～12月（総合的な学習の時間 15時間 社会科 4時間）

○関連 社会科

○目標 ①稲作体験を通して地域の自然や人とかかわる中で、教育水田やその周囲の自然に興味をもち、水系を通した川や海とのつながりを考える。

②横浜港や横浜みなと博物館の見学を通して、貿易港としての役割や工夫を知り、自分たちの住む横浜市や海への関心と理解を深める。



5年生(1)「地域の自然や海とつながる教育水田活動」

【実践のねらい】

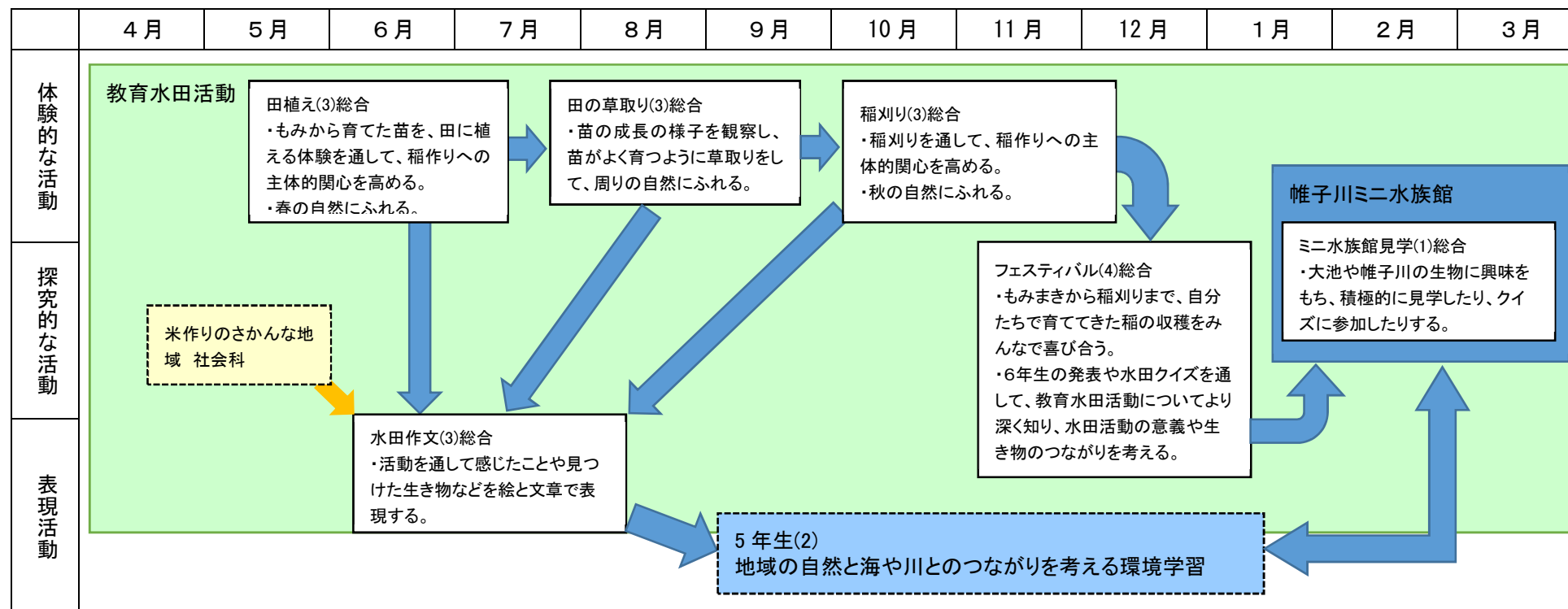
本校ではこの30年来、教育水田活動を実施し、全児童が稲作を体験している。教育水田は帷子川水系の源流域の里山にあり、この水が田をうるおし、帷子川を流れてやがて東京湾に注ぎ込む。自分たちの教育水田活動が川を経て海とつながっており、源流域の豊かな森を育むことで豊かな海の再生が可能であることを、実際の体験を通し学習するようにし、成果を地域に広げたい。

この活動は、教育水田活動を核としながら、各学年ごとに川や海辺の自然に親しみ、それらのつながりを実感できるようなプログラムと組み合わせ、「わたしたちの住むまちの自然は、川を通して海とつながっている」ことを意識させるものである。

○時数 4月～12月（総合的な学習の時間 17時間）

○関連 社会科

○目標 稲作体験を通して地域の自然や人とかかわる中で、教育水田やその周囲の自然に興味をもち、水系を通した川や海とのつながりを考える。



5年生(2)「地域の自然と海や川とのつながりを考える環境学習」

【実践のねらい】

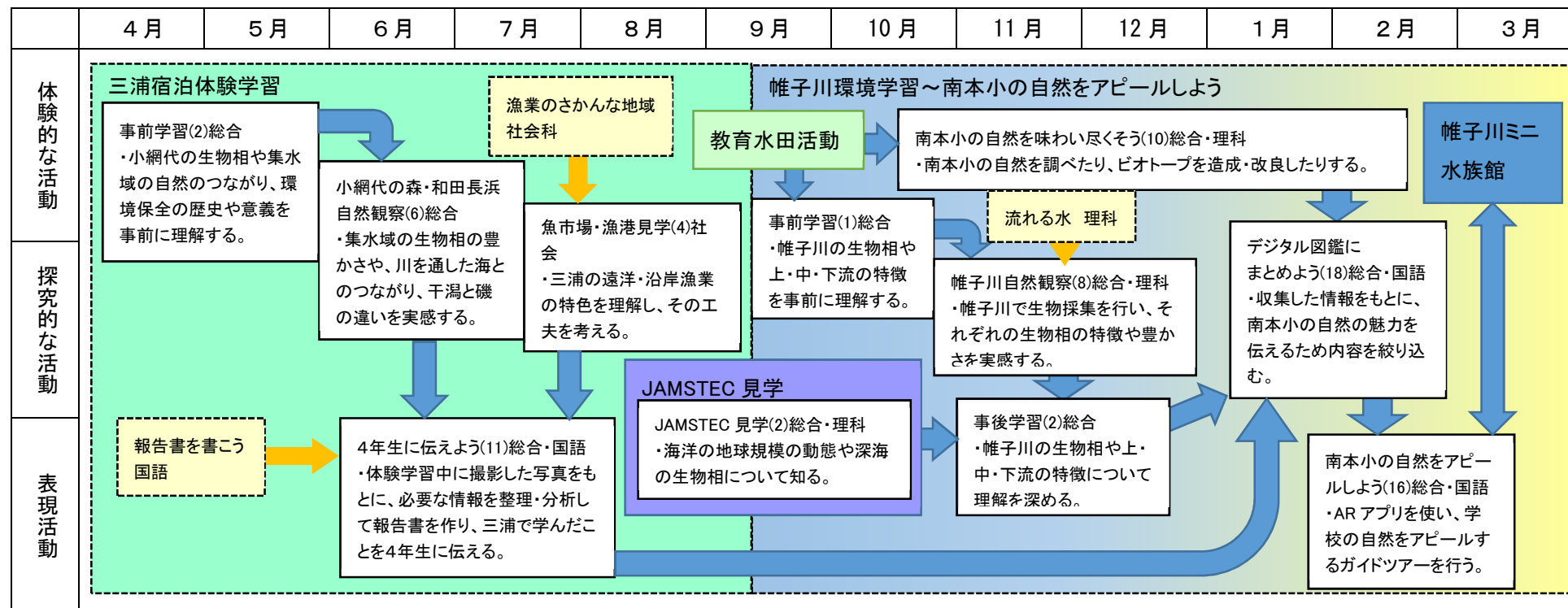
「地域の自然や海とつながる教育水田活動」では、教育水田活動を核としながら川や海の自然に親しみ、川を通した海とのつながりを意識させることをねらっている。

5年生では、教科の学習との関連もあり、校外学習で海や川とかかわる機会が多い。そこで、三浦宿泊体験学習では、集水域が丸ごと保全されている小網代の森を歩くことで、源流の森と海とのつながりを強く意識させる。帷子川環境学習では、帷子川の上流・中流・下流の生物相や河川の特徴をとらえ、川の自然の多様性や学校周辺の自然とのつながりを理解する。これらをもとに学校周辺の自然をとらえ直し、源流域から海までの集水域としてのつながりをより深く考えさせたい。

○時数 4月～3月（総合的な学習の時間 48時間 国語 25時間 社会科 4時間・理科 3）

○関連 国語・社会科・理科

- 目標 ①集水域を歩いたり、干潟と磯の生物相の違いを比べたりすることで、源流の森と海とのつながりを意識するとともに、海の自然の多様性を理解することができる。
 ②帷子川の上流・中流・下流の生物相や河川の特徴をとらえ、川の自然の多様性や学校周辺の自然とのつながりを理解することができる。
 ③南本宿小学校の自然の豊かさをアピールする活動を通して、生態系の一員としての生物の存在およびその多様性や連続性について知る。



個別支援学級「地域の自然や海とつながる教育水田活動」

【実践のねらい】

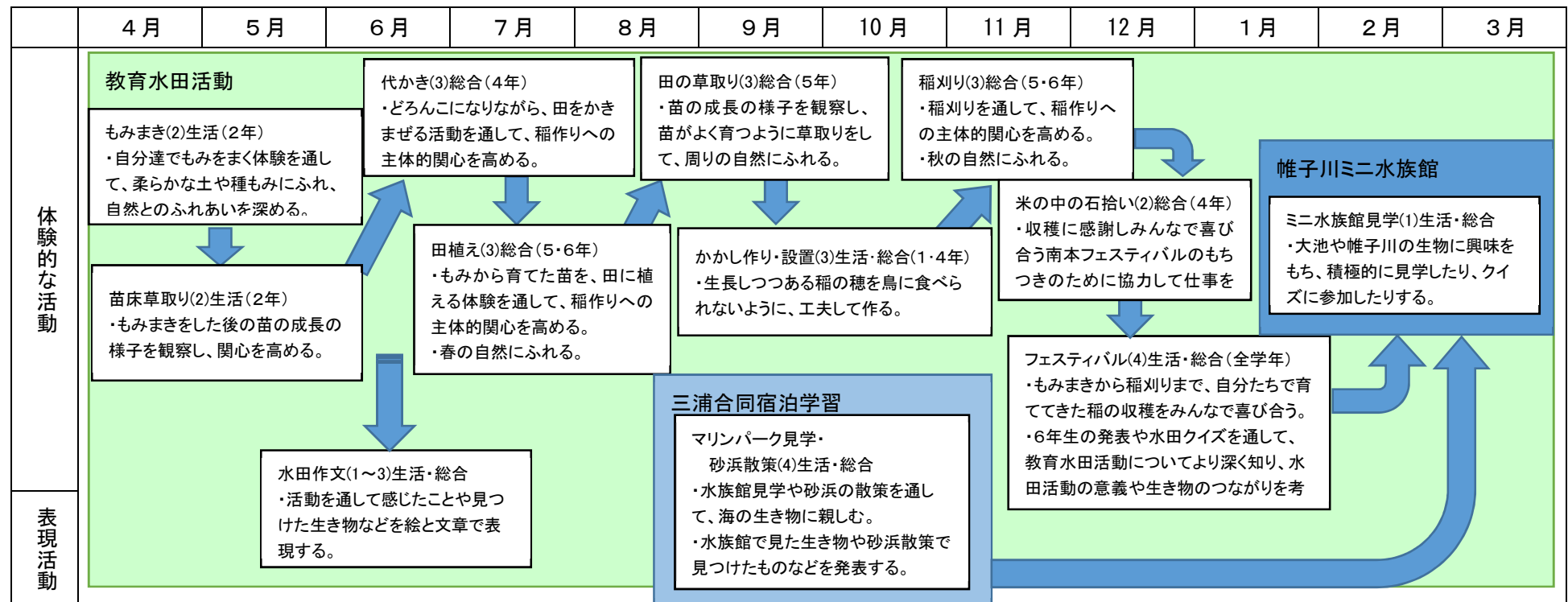
本校ではこの30年来、教育水田活動を実施し、全児童が稲作を体験している。教育水田は帷子川水系の源流域の里山にあり、この水が田をうるおし、帷子川を流れてやがて東京湾に注ぎ込む。自分たちの教育水田活動が川を経て海とつながっており、源流域の豊かな森を育むことで豊かな海の再生が可能であることを、実際の体験を通し学習するようにし、成果を地域に広げたい。

この活動は、教育水田活動を核としながら、各学年ごとに川や海辺の自然に親しみ、それらのつながりを実感できるようなプログラムと組み合わせ、「わたしたちの住むまちの自然は、川を通して海とつながっている」ことを意識させるものである。

○時数 4月～12月（生活科・総合的な学習の時間 1・2・4・5・6年 合計31～33時間：所属する学年により参加する活動が異なる）

○目標 ①稲作体験を通して地域の自然や人とかかわる中で、教育水田やその周囲の自然に興味をもち、水系を通じた川や海とのつながりを考える。

②水族館の見学や砂浜の散策を通して、海の生き物や自然に親しむことができる。



1～6年「地域の自然や海とつながる教育水田活動」(参考)

【実践のねらい】

本校ではこの30年来、教育水田活動を実施し、全児童が稲作を体験している。教育水田は帷子川水系の源流域の里山にあり、この水が田をうるおし、帷子川を流れてやがて東京湾に注ぎ込む。自分たちの教育水田活動が川を経て海とつながっており、源流域の豊かな森を育むことで豊かな海の再生が可能であることを、実際の体験を通し学習するようにし、成果を地域に広げたい。

この活動は、教育水田活動を核としながら、各学年ごとに川や海辺の自然に親しみ、それらのつながりを実感できるようなプログラムと組み合わせ、「わたしたちの住むまちの自然は、川を通して海とつながっている」ことを意識させるものである。

○時数 4月～12月 (生活科・総合的な学習の時間 合計37～40時間:学年により参加する活動が異なる)

○目標 ①稲作体験を通して地域の自然や人とかわる中で、教育水田やその周囲の自然に興味をもち、水系を通した川や海とのつながりを考える。

※教育水田活動は学年により担当する作業が異なる。2・4・5年の海辺体験は学年ごとにストーリーマップを作成し、1・3・6年は本図で一括した。

